
夢の終わり / 灰色の日

ビッキー・ホリディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の終わり／灰色の日

【Nコード】

N9763V

【作者名】

ビッキー・ホリデイ

【あらすじ】

僕は夜更けにひとりで酒を飲んでいた。するとどこからか、半年前に別れた彼女の声があった。その声に誘われるように、僕は彼女と二人きりの世界へと行った。そこであのときに見つけられなかったものを見つげるために、僕と彼女は歩き出した。

（前書き）

拙作「真夏の星空は少しブルー」の続編といたしますか、それと関連した話ですので、そちらから読むとわかりやすいと思います。もちろん、読まなくても大丈夫です。

電気を点けてキッチンへと向かうと、僕は戸棚からフォアローゼスを取り出した。それからグラスに氷を入れ、居間へと出てからフォアローゼスを半分くらいまで注いだ。さっきまでの団らんの余韻が残るこの場所で、ひとりテレビも点けずにウイスキーを飲む。僕はこの時間が好きだった。

一口飲むと、琥珀色をしたバラの香りのような、危なっかしい美しさをもつ匂いが鼻を通った。触れると壊れてしまふ、そんな儚さをもつ味だった。

両親は眠っている。両親に限らず、近所でも明かりが点いているのは僕のいる居間くらいで、どこの家もみんな眠っていた。街は静かに夜が明けるのを待っていた。僕はグラスを傾けつつ、その空虚な時間に留まるようにして、世界の流れの中で立ちすくんでいた。もしも永遠というものが存在するならば、きっとこの時間なのだろう、そう思っている。

「ねえ、『愛してる』って言って」

半年前に別れた彼女の言葉が、ふらふらと現われ、僕の頭の上を泳ぎ始めた。彼女と別れる数分前に、彼女が言った言葉だった。

そうか、今日は君について考えるのも悪くはない。僕は空いたグラスにまたフォアローゼスを注いだ。はあ、と無意識のうちのため息がこぼれる。そのため息もふらふらと彷徨うように泳ぎ始めた。

しかし彼女のことを考えるもなにも、僕にとってはこのため息がすべてだった。結論であり、結末であった。それはあのとぎにため息をついたから、というわけではなく、言葉にしなかったもの、できないもの、そうだった微妙なニュアンスをすべて含んだものがいま、ため息として出たということ、あのとぎにどうしたかはまた別の話だ。

「ねえ、『愛してる』って言って」

それでもまた、彼女の言葉が現われた。僕は諦めて「愛してるよ」と呟いた。目を閉じると、暗闇の中に彼女の顔が浮かんだ。優しく僕を見て、微笑んでいた。だけど目の奥はどこか寂しそうで、まるで彼女がどこか遠くへ行ってしまったかのような気持ちになった。そうして君は去っていったんだ。

目を開けて僕はまた一口、フォアローゼスを飲んだ。飲むごとに喉が熱くなる感覚が薄れていき、自然と喉を通るようになっていった。僕は首を横に振って、また目を閉じた。彼女は背を向けて歩き出した。彼女との距離がどんどん離れていく。彼女は振り返らない。僕は彼女を追った。すぐに追いつき、僕が肩に手をかけると、それでようやく彼女は振り返った。

「愛してるよ、だから」
彼女は人差し指を僕の唇に当て、僕の言葉を遮った。そうしながら、彼女はうつすらと微笑んだ。指が唇から離れても、僕は言葉が出なかった。

二人黙ったまま見つめあっていた。すると彼女は満面の笑みを僕によこした。僕は彼女のその笑顔が好きだった。そして彼女はまた僕に背を向けて歩き出した。僕も黙って着いていった。

目の前に木製の古めかしいドアがあった。周りの風景はぼんやりとしていて、森のようにも思えればどこかの住宅街のようにも思えた。ドアだけがはっきりと存在していた。

彼女はドアノブに手をかけて、ゆっくりと引いた。僕はドアを手で支えて、先に彼女を通した。それから僕も中へ入っていった。

ドアが後ろでゆっくりと閉まっていく。完全に閉まるのと同時に中の世界を認識することができた。そこは海岸だった。目の前には海が広がっている。波が静かに揺らめき、その音を聞いているとても安心できた。彼女はそばに積んであるテトラポットに腰をかけた。僕もテトラポットに登り、彼女の横に座った。

潮風が僕らを包むようにして流れている。僕ら以外誰もいない。僕は彼女の横顔をじっと見つめた。彼女は楽しそうに、どこか遠く

を見ながらハミングしていた。僕も彼女の視線の先を見た。海がずうっと先まで広がっていて、雲のない空と交わっているようだった。「なにを見てるの」

僕がそう訊ねると、彼女は僕のほうを向いた。綺麗な笑顔だった。僕が微笑み返すと、彼女はテトラポットから降りた。僕もそれに続いて降りると、彼女は砂浜を歩きはじめた。すぐに僕も追いついて、二人で並んで歩いた。

彼女はなにも話さない。僕も黙ったままだ。それでも彼女はどこか楽しそうだった。こうして歩いているだけなのに、僕はとても心地がよかった。言葉なんて要らないと思った。

こうして彼女と歩くのは久しぶりだった。別れてからは連絡も取らなくなり、会うことはなくなった。それなのに、と僕は思った。まるで付き合っているときのようにではないかと。

海岸はどこまでも続いていた。僕らは歩き続けた。そうすることになんの意味もなかったが、それでも歩くことをやめなかった。僕にとっては彼女が横にいる、それだけで充分だった。

「もう、別れましょう」

唐突に彼女の声があった。しかし彼女を見ても、ただ楽しそうに前を見て歩いているだけだった。彼女が言ったとは思えなかった。

「もう、別れましょう」

また聞こえた。まるで僕の頭の中でこだましているようだった。

「どうして」

僕はそう訊ねた。「どうしてって……」困ったような声がする。

「だって、わたしのこと好きじゃないんでしょう」

「そんなことはないよ」

「嘘よ」

あのときと同じだ、と僕は思った。

「嘘じゃない」

「嘘よ、じゃあ、なんで」

それから先は聞かないでもわかった。

「でも、いまが答えじゃないの」

僕は歩いていて彼女に言った。そうだ、現に彼女は楽しそうだなにも言わないでもよかったし、言う必要もなかった。

「そんなことはないわ」

彼女は僕のほうを向いて言った。それでも歩みは止まらない。

「わからないよ」

僕は首を振って言った。わからない。これではいけないのか、なにがいけないのだろう、彼女はなにを求めているのだろう。

彼女のほうを見ると、正面を向いていた。僕からは横顔が見える。「そんなことはない」と彼女は言った。では、どういうことなのだろう。その横顔からはなにもわからなかった。

どれくらい歩いただろうか。景色が変わらないので、まるで見当がつかなかった。もう、相当歩いたように思えるけど、疲れはなかった。横からは彼女のハミングが潮風に乗って聞こえてくる。僕はこのままでいいと思っているけど、きつと彼女は「待って」「いるのだろう。僕はその鍵を握っている。しかし差し込むべき鍵穴が見つからない。

付き合っていたころは、よくいろいろなところを二人で歩いた。付き合い始めたその日 終電間際のことだった は、彼女の地元駅からふらふらと夜を歩いた。そのとき、彼女はふと、意味深な微笑みをたまにすることがあった。あのときはぼんやりとその意味を理解することができた。あのときも彼女は「待って」「いた。

でも、僕は彼女といるときの、時間が優しく流れていく感じが好きだった。そう、たとえばいまのような時間。ときおり彼女の横顔を見ながら、並んで歩いているこのとき。

彼女も僕と同じだと思っていた。いまだってそう思える。しかしそうではなかった……。

僕はどうすればいいのだろう。横にいる彼女はなにも話さない。答えは彼女だけが知っている。訊けば答えてくれるだろうか。いや、これは僕が自分自身の力で見つけなければならぬ。そう思った。

これは僕の問題なのだから。

そつと彼女の手を握ろうとした。しかし手を掴むことはできなかった。いくらやっても通り過ぎていくようだった。僕はだんだん怖くなってきた。そこにいるはずの彼女が、時間の流れの中へ溶けて消えていってしまうような、そんな気がした。いまを逃したら、きつと二度と逢えなくなってしまう。

彼女はハミングをやめていた。波音だけが聞こえてくる。このなにもない世界で僕は大切なものを探している。それは僕自身の問題であつて、同時に彼女のものでもある。

僕は彼女と別れてからのことを考えた。また誰かと付き合おうとは思わなかった。元の鞆に戻りたいとも思わなかった。あの日を境に僕にとつてのなにかが終わりを告げた。少し寂しいような気もしたけど、だからといって泣いたり、酒を飲んだりすることはなかった。

それからひとりで小説を読んだり、たまに友人と遊んだりごく普通の生活を淡々とこなしていた。彼女のことを嫌いになつたわけではなく、ただ単に終わったこととして僕は受け入れたつもりだった。彼女との時間は、「ああ、楽しかったな」と思えるひとときだった。

別れてから半年が経ち、こうして僕は彼女と海岸を歩いている。思い出というものはアルバムに綴じて、そつと奥にしまい、そして開くことはしないものだと思つていた。しかし、いまはそう言つている場合ではない。切実にそれを必要としている。

彼女が笑つているとき、怒つているとき、拗ねているとき、喜んでいるとき、はにかんでいるとき……いくらでも挙げられる。そういった記憶は、いまでも胸が苦しくなるような気恥ずかしさがあった。

だけど、どれも彼女の求めているものではないような気がする。もつと潜在的で根本的なものだと思う。

「わたしのこと好きじゃないんでしょう」

また彼女の言葉が僕の頭の中でこだました。

「そんなことはないよ」

そうだ、そんなことはない。僕は僕なりに一生懸命なつもりだった。

彼女は悲しそうな目で僕を見ていた。僕はそんな表情を見たくはなかった。いつでも笑っていてほしかった。けどあのとき、僕がいくら話をして彼女には届かなかった。僕の言葉は風のように吹き抜けていってしまった。それが非常にもどかしかったのを憶えている。

そう考えていくうちに、やっぱり僕は彼女のことを好きだったんだと思った。そして、それはいままた改めてそう思った。やり直したい、ではなく、ここからまた始めたい。心からそう思った。

この気持ちに対してなぜ、と問われても、答えることはできない。そこには理屈なんてなかった。そして、この世界にも。

彼女はやはり「待って」いた。こちらに背を向けるようにしてテトラポットの上に腰かけていた。僕はそれに登り、彼女の横に座った。

僕らはここへ戻ってきた。しかし、さっきまでとは違う。このなにもない世界で、僕は見つけることができた。

「ねえ、『愛してる』って言って」

彼女はじつと僕を見据えて言った。別れたあのときと同じだった。けど、あのときと同じことは繰り返さない。

「愛してるよ」

僕がそう言うと、彼女は微笑んでから目をつむった。僕も目をつむって、そつと彼女と唇を合わせた。そうしながら僕は彼女の手を握った。彼女も優しく握りかえしてくれた。

もう離したくなかった。徐々に波音が遠ざかり、彼女の呼吸の音が小さく聞こえてきた。

ゆっくりと目を開けると、氷が溶けて薄くなったフォアローゼスがあった。そつと唇に手を当てると、彼女の温もりが伝わってくる

ようだった。

薄くなったフォアローゼスを飲むと、僕はテーブルに突っ伏してまた暗闇の中に彼女を捜した。彼女はどこにもいなかった。思い出そうとしても、霧がかかったように曖昧にしか浮かばなかった。手を伸ばしても届くことはなく、次第におぼろげな彼女の姿が、闇に消えていってしまった。

頭を上げて、グラスに残ったフォアローゼスを一気に飲み干した。すると涙がこぼれてきた。それに気づくと、もう止められなかった。僕は嗚咽を漏らしながら泣いた。またテーブルに突っ伏して、暗闇の中でさらに泣いた。

「愛してるよ」

僕の言葉は頭上を漂い、敢えなく消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9763v/>

夢の終わり / 灰色の日

2011年8月25日03時10分発行